

月明の一痕としてわが歩む

藤田湘子

湘子は、十六歳の時、故郷小田原城の月明りの道で見た桜の蕾に、詩ごころをかきたてられ、俳句を始めた人である。それからずっと、折々の月を仰いで来たことだろう。

昭和六十一年二月三日には、三年間続いた「一日十句」が終了した。その後のやや虚脱し模索している状態のとき、母を亡くした。『前夜』には、六十一年の作品は十四句しか残されていない。掲句は、その翌年の作である。静かな心の軌跡を感じる。

「梟が啼けば荒野へ還るわれ」と詠んだ湘子の詩心の厳しさと、月と共に歩む己の影を「一痕」と捉える厳しさと、通底しているように思われる。

1987年（昭和62年）第九句集『前夜』 鑑賞・野本京